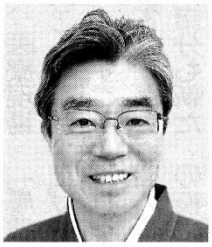
第43話

朝をひらく

墓の意義考える

参る人いる限り継承

永田 円了
真国寺住職



最近〝墓じまい〟される方が急に増えている。墓じまいとは、無縁墓になる前に先祖代々の墓を処分することをいう。墓は誰が守り継ぐのか、それとももう墓は必要ないのか、お墓の存在価値を考えてみたい。

かつて日本では一つの墓に1人が埋葬される土葬が中心だった。明治の民法で家の継承を重視する家制度が定められると、先祖代々一家がまとめて一つの墓に祭られる形となる。戦後の核家族化、少子化に伴って、継承者不在のお墓（無縁墓）が増えた。そして今、無縁になる前に、墓を処分しようとする人が増えているのである。

そもそもお墓は何のためにあるのだろうか。その機能は二つである。一つは遺骨を納める場所としての機能。二つめは、残された人が死者と向き合う場としての存在である。お墓がないと、残された者がどこに向かって手を合わせたらいいか分からないからである。

大小4千基のお墓が寄り添う境内墓地を歩くといつも、ある墓石に目が留まる。小ぶりで品のいいそのお墓には、今年もきれいなお花が盛りこぼれそうに添えられている。

その男性が真国寺を訪ねたのは、ちょうど7年前の9月。その年逝った母親の墓を建てるため来寺、墓は約1カ月半ほどで完成した。11月には母親の納骨が終わり、年明けの1月、あろうことかその男性本人の訃報が私のもとに飛び込んだのである。

40代後半に見え、物静かで控えめな男性、職業を聞いて少し驚いた。純銀製のバッジをつけることもなく、市井の人として来寺されたその方、東京で活躍中の弁護士であった。雪をスコップでかき分け、東北から駆けつけたお兄さんと私と2人で、遺骨は3カ月前に安置された母親の隣に納骨された。

雪が解け春がきた。春彼岸を待たずして彼のお墓には、花々が山のように積まれた。「親族の方ですか？」「いいえ、先生にお世話になった者です」。私は好奇心から、その方はどのような方だったのですか、と尋ねた。

「このお方は、私たちのために一生懸命に闘ってくれた方です」「でも私たちから一銭もお金をとろうとしなかった」。寺の玄関先で泣き崩れるように話す方々。7年を経た今も、彼のお墓にはお花が絶えたことはない。

お墓は、お参りされる存在になっている限り、たとえ将来の継承者が不在でも、墓じまいされることなく、静かに私たちを見守り続ける。